

一四 對馬方言と朝鮮語との交渉

(附、朝鮮と關係ある對馬風俗)

古代に於ける對馬

對馬は「古記事」(神代卷之三)に「前略、次生津嶋、亦名謂天之狹手依比賣」とあつて、大八嶋國の一つに數へられて居るが「日本書紀」には大八州おほやしまの國名を擧げた後に「即對

馬島壹岐島及鹿々小島、皆是潮沫凝成者矣、亦曰水沫凝而成也、と書いてある。所傳少しく相違はあるが、兎に角大八州の一に數へられる程の古さを持つて居たといふ事は明かである。其の後天^{あめのは}菩^{ひん}比^み命^{みこと}の御子建比良鳥命^{たけひらのみこと}が對馬を治められ、津島縣^{つしま}の祖とならせられたといふことが「古事記」(神代卷^{之五})に出て居る。

然るに朝鮮側の記録によると、對馬を以て元は朝鮮の領地であつたと書してあるものが少くない。例へば魚變甲の書いた「征對馬島教書」(選^{東文})中に

對馬爲島、本是我國之地、但以阻僻隘陋、聽爲倭奴所據、

とあり、卞季良の「諭對馬州書」(選^{東文})に

對馬爲島、隸於慶尙道之鷄林、本是我國之境、載在文籍、照然可考、

とあり、「東國輿地勝覽」に

對馬州舊隸我鷄林、未知何時爲倭人所據、

などである。その他

「在伏見時、執政大炊問曰、馬島本是朝鮮地方云云、然乎、小的答曰、未能詳知也、然而以道路遠近言之、則馬島之於日本則遠矣、朝鮮則唯隔一海、得半日可往還耳、大炊

日爾島必是朝鮮地方、宜勉力於朝鮮事、云云。(李石門扶桑錄 萬曆四十五年)

舊是我國地方、而不知何代沒於日本。(金東溟海槎錄 崇禎九年)

伊昔、鷄林之國全盛時、馬州屬我版籍、無東憂、何年甌脫反入蠻子手、云云。(趙龍州、

東槎錄 崇禎十六年)

「以此言之、一島生涯專靠於我國矣、馬州之人累百年厚蒙衣食之盛惠、可謂骨日本而肉朝鮮、(中略)蓋此馬島本是朝鮮所屬、未知何國何時入於日本、云々」(海槎錄 乾隆二十年)

等の記事が見えて居る。尙ほ此の他にも同種の記事が多からうと思ふ。

我が國の文獻上から見れば、對馬が既に神代に於て我が國大八州の一として數へられ、最も古い歴史を持つて居ることは、既に前にも述べた通りである。延喜式に記されてある對馬島内の神社數も可なり多く、且つ其等神社の名稱や緣起の古めかしい點などから考へて見ると、益々其悠遠なるを推知し得るのである。

一方朝鮮側の記録は何れも我が記紀の年代に比較して極めて新らしく、十分根據ある説として信憑することが出來ぬ。

然らば朝鮮は何故に對馬を以て其の屬島と考へたであらうか。それは恐らく

は朝鮮との經濟關係に基因するものであらう。蓋し對馬島は蜿蜒たる山脈南北に縱走し、更に幾多の分脈島中各處に伏起し、地勢峻峻にして、總面積の七割七分は鬱蒼たる山林を以て蔽はれ、畑は其の一割五分、田は三分、原野は五分といふ、極めて平野に乏しい地勢を有して居る。島内所産の米穀を以て六萬餘の住民を養つて行くことの至難なるは何人にも容易に認め得る所であらう。對馬の島主たる宗氏が其の後援者たる武藤氏を失ふや、爾後九州地方に其の志を伸べんとするも得ず、其の住民を養はんがために、已むなく朝鮮に向つて食料の供給を仰がざるべからざるに至つたのは、寧ろ當然の事といはねばならぬ。今日該島の重なる移入品は米、鹽、砂糖、酒、煙草、織物等で、其の中の米は朝鮮から移入せられるものが少くない。明史に

「萬曆二十九年、朝鮮與日本對馬島一水相望、島地不產五穀、資米於朝鮮、云々」といひ、芝峯類説に

「對馬島地皆沙石、居倭專靠我國開市、以爲生理、平時嶺南田稅大半歸之、世傳宗盛長其先本我國宋姓人、入其島爲島主、變姓爲宗、云々」

などである、其の一端を物語るものである。斯る經濟上の密接なる關係が兩者の間に存して居たところから、後世對馬は朝鮮の領地であるといふやうな傳説を生ずるに至つたものであらう。

對馬と朝鮮との歴史的關係はこれまでとし、次に對馬方言と朝鮮語との關係に就いて一言を費さうと思ふ。元來對馬の言語に關しては古來種々の臆説が附け加へられて居た。即ち對馬方言には多くの朝鮮語が割り込んで居る。即ち該方言は國語と朝鮮語との混淆語ミストであるといふやうなことが言はれて居た。朝鮮の書籍中にも

〔對馬壹岐等島、與我國相近、風俗言語甚不相遠、以此聞兵亂之時、我國避亂之人遇對馬之人則必生、遇他島之人必死、我國之人亦然、雖值方戰之時、知對馬之人則皆不欲殺之矣〕（亂中雜錄）

などと書いてあつて、余も以前から奇異の感に打たれて居た。そこで大正三年の夏、余は休暇を利用して該島に赴き、該方言の性質を明かにすることを得た。其の結果によると對馬の言語は九州北部方言と殆んど其の型を同じうするもので

あつて、それが國語と朝鮮語との混淆語であるなどいふ説は全然誤りである。勿論地理上歴史上の關係から、多少の朝鮮語が該方言中に侵入したことは争はれぬ事實であるが、それは決して對馬方言を組織から顛覆するやうな大勢力のものでなく、單に普通に言語の發達變遷史上に有りふれた言語の貸借又は外來語と稱すべき一部の言語現象に過ぎぬのである。若し夫れ比較言語學の立場から兩者の根本類似を證せんとするならば、極めて興味ある問題であらうが、それは考古學的人類學的研究と相俟つて最も慎重に決定せらるべきものであつて、今日吾人の知り得る言語資料を以てしては、未だ其の然る所以を斷定する域には達し得ないのである。故に茲では専ら有史以後に於ける兩語の交渉貸借關係に就いて考查する積りである。

扱て有史以後の日鮮語關係はどうであつたらうか。古くは三韓諸國人の對馬入寇又は朝貢、近く通信は行使の往來等、其の間の關係が頗る密接に行はれたのであるから、朝鮮語が不知不識の間に對馬方言中に這入つて來たといふ事は勿論否定することは出來まい。併し其の入寇たる眞に一時の現象に止まり、又其の

通信貿易を目的として渡來せる者の數も極めて少數に過ぎなかつたから、單語などの輸入は多少あつたにしても、根本的に語法上の點までにも喰ひ込んで影響を及ぼしたなどいふことは萬々あるまいと思はれる。朝鮮人以外にも支那、蒙古軍などが屢々入寇して掠奪をほしきまゝにしたこともあつたが、言語の上に特に影響を及ぼしたやうなことは無かつたらしく思はれる。(該島の方言で「袖」を「唐人てぐり」又は單に「唐人」といひ、無花果を「唐柿」などいふ例はある。が、此等は必ずしも對馬にのみ限つたものでもあるまい。)

對馬方言中
に入つた朝
鮮語の例

以上の如く余は對馬方言と朝鮮語との間に根本的の系統的關係を認めぬのであるが、單語の上の交渉は昔から盛んに行はれたやうに思はれる。今茲に對馬方言中朝鮮語と斷定し得るもの、又朝鮮語ならんと推定し得るものの數種を擧げ、研究者の參考に供しようと思ふ。昔時は交通貿易上の用語としてのみ用ひられ、一般人民の日常談話中に使用せられなかつた種類のものも澤山あるが、茲では其の中の二三の主なる語、及び現今一般に使用せられて居る數種の朝鮮語に就き些か説明を加へようと思ふ。

○京畿道、忠清道、慶尙道、全羅道、江原道、黃海道、咸鏡道、平安道。以上八道の讀方は

對馬で書かれた集書といふ書に出て居る。而して此の八道の名稱は讀方に多少づつの相違はあるが、壬辰役以來我が國人の口に膾炙せられ、徳川時代の各種文書及び辭書等にもよく掲出せられて居る。併し對馬でも今はこんな讀方をせず、國語の字音通りに呼んで居る。

○看品。見本のことである。各種の對馬文書にも皆「かんぼく」と讀ませてある。康熙十五年、日本語學書として朝鮮で出版せられた「捷解新語」中にも、此の語を日本語に翻譯せずして、矢張り「かんぼく」と讀んで居る。餘程特殊の意義を有して居たと見ゆる。

○求請。又「くせぐ」ともいふ。對州から朝鮮に向つて産物を請ひ受けることである。

○しけ。物を負ふに用ひる器具。形は朝鮮の「지개」と略同一で、名稱も明かに朝鮮語の訛りである。今は島内の山地にしか使用せられぬが、朝鮮の實物が今尙ほ殘存して使用せられて居ることは、中々面白い事實といふべきである。

○せんさん。「せんさき」又「せんさく」ともいひ、防波堤のことである。これ亦朝鮮語

「船滄(선창)の訛りであらうと思はれる漢字の上では、船滄に防波堤の意味がありさうにも思はれぬが、古い記録中には確かに防波堤の意味に使はれて居る。即ち集書といふ書には、船滄内法として、西より東まで幅七拾八間半(御番所前向船滄)北より南まで豎百二十二間(船滄)船滄浦口三十四間四尺などあり、又「和交覺書」なる書中には、此比舟ヲ繫ギ難シト云ヲ以テ改メテ船滄ヲ築ク、「且貴州ノ懇望ニヨリ改メテ船滄ヲ築ク」是ニヨリテ其後船滄ヲ築ク」などあつて、其の中の一個所には朱筆で「センサン」と假名を振り、又他の二個所には各々朱筆で「フナヤ」「フネツナギ所」と註して居る。一方「センサン」と註して居るのを見ても、朝鮮語であつたといふ見當がつくのである。

○送使。徳川將軍家又は對州宗家などから送る特送船の總稱であるが、對馬では其の朝鮮音「舍々」を訛つて「そさ」といひ、日本語としても可なり廣く用ひられたらしい。

○ちよつこめい。「ちよつこめい奴」など小なる事にいふ。對馬の人々は朝鮮語적(小)の訛言であるといつて居るが、國語にも「ちよこさい」「へなちよこ」など同一

の意に使はれて居る語がある。此等日本語の「ちよこ」は對馬方言の「ちよつこと」共に朝鮮語に關係あるものであるか、或は國語と朝鮮語とが偶然の一致を見たのであるか、尙よく詮索せねばならぬと思ふ。

○通事。「集書」其の他の書にも、此の語が出て居る。朝鮮字音「亨ふ」の訛りである。

○ねんがみ。朝鮮語「令監(령간)の訛りであつて、今日でも朝鮮人は内地人を尊稱する場合に「ねんがみ様」などといつて居る。該島老人の談話によると、對馬では古くから此の語を用ひて居たといふことである。

○はね。海邊の淺瀬にあり、潮の干満により見わづ隠れつする暗礁の如きものをいふ。岩石の海中に突出せるものを「出ばね」といひ、又此の岩石に群棲する一種の蟲を「はね蟲」と稱して居る。此の「はね」なる語は朝鮮語「岩」の義ある「바위」の訛りであるまいかとも思はれる。

○判事。役名である。これ亦朝鮮字音「판사」の訛稱である。

○ぶ。小兒が火を指していふ。或人は朝鮮語「火」の訛りであるといふが、小兒の語とすれば、國語でも解釋が出来る。

○訓導。昔時主として通譯の任に當つたものの職名で、和交覺書其の他の書にも出て居る。これ亦朝鮮字音「훈별」の訛りである。

○別差。訓導の下に屬し、釜山に居た役人の職名である、訓導別差を略稱して訓別ともいつた形跡がある。

朝鮮側の記録にも訓導別差なる語が屢々用ひられ、訓別なる語をも使用したらしい。例へば『海東繹史』(卷二)倭館開市の事を述べた條に、次の記事が載せられてある。

〔前略〕凡一月六開市、若倭人有請、或物貨委積之時、則又許別開市、商賈等受牌於東萊府、持物貨詣守門、則訓導別差及收稅官開市、監官、眼同檢驗、置簿入送、訓別乃爲入坐大廳、諸商各以其貨、以次交易而退、云々。〕

○むくる。食ふことをいふ。朝鮮語「먹다」と關係あるといふ人もある。

以上列舉した所、其の數餘り多くはないが、尙ほよく研究したならば、其の數も可なり増加するだらうと思ふ。近來は朝鮮對馬間の交通日に増し頻繁になつた結果、「ちよんが」「ばあさき」「よば」等の朝鮮語が、内地の他の地方よりも強大な勢力

朝鮮と關係
ある對馬の
風俗

佐護附近の
衣服

物を頭上に
載せて運搬
すること

で侵入しつゝあるやうに思はれる。

對馬方言と朝鮮語との交渉に關することは以上を以て終りとなし、茲に序に對馬風俗中二三朝鮮に關係あるらしく思はれるものを列擧して、鮮對文化比較上の參考に供しようと思ふ。

衣服は田舎では勞働する者が多いから、男女共筒袖であるが、麻布白地に黒い細筋の入つた着物を着て居るものが多い。渡島前余は友人より對馬佐護村附近では里人は朝鮮人と同様白衣を纏つて居ると聞かせられ、些か異様の感に打たれたが、實際を見るに及んで、そは些か誇張の嫌があつたことを知つたのである。物を運搬するには山間の或る地方では「シケ」（朝鮮の「支那」に當るもの）を用ひるが、普通には男女共籠（かご）を背負ふのである。籠には大小あり、大なるを「スカリ」、小なるを「テボ」といひ、全島に亘つて廣く用ひられ、大きな町村以外には天秤棒の如きものは殆んど見ることを得ぬ。然るに對馬嚴原八幡社神官たりし小川達道（十年前より死）といふ人の書いた隨筆「拾遺」は小志卷四の中に次のやうな面白い記事がある。

〔對馬物賣ノ様 府内（今嚴原）近村ノ女ノ物賣ル様ハ廿年餘リ前ハ手拭ヲ小サク

輪ニ丸メソレヲ頭ニ戴キ其ノ上ニソウケ竹ニチアミタル籠ノ高サ七八寸幅一尺五寸モアル丸キ籠ニシテ物ヲ入ル器ヲソウケトイフ下ハ狹ク上ハ廣クニ賣物ヲ入戴キヲウリ歩ク其賣聲ハ大根カハシレムナ菜カハシレンナトフシヨク云ヒテウリシ也近年ニ至リテハ大キナル手甫ヲ背負ヒ戸毎ニ入り御内サマ何々ハイリマセムカトニクサゲナル賣方ニナリテイカニモ卑キ様ニナレリ云々

之を以て見れば明治初年の頃まで嚴原附近では物賣が品物を頭に戴せて歩いたといふことが分る。京都の大原女、八丈島の女、朝鮮の女など皆今でも頭に物を戴せる。これらも風俗史上の參考になるであらう。